

怪人だけでなく、市民からも輪姦されようやく解放された蒼紫は一晚眠ると授業に行くために電車に乗り込んだ。

「はぁ……」

昨日までの出来事ですっかり落ち込んでいた蒼紫はその前に何を約束していたのかを忘れていた。

「……っ！」

ぐっと尻を揉まれ蒼紫が息を飲む。

「蒼紫君、久しぶりだね」

「んっ♡あっ……♡」

ビクと蒼紫の身体が反応する。尻を揉まれて悦んでいる自分に戸惑う。

「気持ちいいんだね。三日も休んでいたからどうしたのかと思ったよ」

「やめて……やめてください……」

尻を揉まれながら耳許で囁かれる言葉に蒼紫は呻くように声に出す。電車には乗客がほとんどいなかったのが救いだ。だが、痴漢一人のためには車両を変えることもできない。

蒼紫は必死に羞恥に耐えようとする。

だが、刺激されると敏感に反応するようになってしまっている。

しかも満員電車ではないので人との距離があり、余計に感じてしまう。

「今日も可愛がってあげるからね」

かりっ♡と耳朶を噛まれて息が詰まる。ズボンの中に大きな手が入り、ズボツとアナルに指が入り込む。

「おやおや、ここはすっかり解れて……ひとりでしたのかな？」

「ああっ♡ちが、あっ♡あっ♡」

尻を揉まれ、指でアナルを拡げられて挿入されるともう抵抗できなかった。声が出ないように口に手の甲を当てて快楽に耐える。

「どうしたの蒼紫君、腰揺れてるよ」

痴漢の言う通りだ。すでに蒼紫は快楽を得ている。身体のどこを触られても声が洩れてしまう。

「しょうがないな、動かしてあげるよ」

「うっ♡あっ♡ああっ♡」

グチッグチッとなかを指で搔き回され、前立腺を刺激される。

電車の振動がより快感を引き立てていた。

「あっ♡んっ♡あっ♡イっちゃ……っ♡♡ふっ、ううゝゝゝっつっ♡♡」

ビクンッ♡と蒼紫の身体が大きく跳ね、痴漢の指を締めながら達する。

「あは、蒼紫君またイツちゃったね。」

「はあっ……はっ……はあ……」

痴漢がズボンから手を抜き、蒼紫はようやく解放されたと思った。しかし、その期待はすぐに裏切られる。

「でもまだ満足できないだろう？ ほら、君の大好きなおちんぽだよ」

「ひっ♡」

ズブンツと一気に挿入され蒼紫の背が大きく反り返り、足がガクガクと震える。

（あ、あぁっ♡おちんちん♡でっかいっ♡♡）

ゴリツゴリツと中を抉られながら動かされる。ガクガクと脚が震え、声が洩れる。それでも電車の揺れのおかげで周りには気付かれないだろうと安堵した。痴漢に押し掛かれると熱い息が耳にかけられる。

「はぁ……蒼紫君、君のここはハメればすぐに解れるいい穴だね」

「あっ♡あっ♡やぁっ♡」

（ちがっ……これは……昨日までの戦いのせいで……）

